

BDCプロジェクトの開始

フィルムセンター主幹

岡島尚志

Hisashi Okajima | Chief Curator

文化庁が昨年度から実施している美術館・歴史博物館重点分野推進支援事業の公募に対して、独立行政法人国立美術館(事業の実施主体は東京国立近代美術館フィルムセンター)は、「映画におけるデジタル保存・活用に関する調査研究事業」(事業名称)をもって応募し、平成26年度についてそのプランが採択され、また、27年度についても継続して採択されることとなった¹⁾。

これは、映画の撮影・ポストプロダクションから配給・上映・保管といったすべての工程でフィルムの使用が減衰し、いわゆる“デジタル生まれ”(ボーンデジタル)の映画が主流になった現状と、その今後、すなわち本格的なポストアナログ時代を見越して、製作されるデジタル作品や映像記録が、長期にわたって忠実性を維持しながら、安全保護され保存されていくための方法に関する調査研究を柱の一つとした、新時代の映画保存や利活用をめぐるわが国初の総合的な学術プロジェクトである。

事業名の英訳はNational Research Project for the Sustainability of Born-Digital Cinemaとし、その略称をBDCプロジェクト(BDC Project)とした。映画・映像の長期保存に関しては、こ

れまでpreservation、conservationといった基本語を中心に、他の文化財や知的財産の保存に共通する多くの伝統的語彙が使用されてきたが、デジタル時代になってこれらにも変化が訪れつつあり、その代表的なもの一つとして頻出し始めたのが、本邦ではむしろ環境問題を論ずるときに目にすることが多い“持続可能性”という言葉である(sustainable preservation of born-digital televisionといった使い方をする)。この語はデジタル映像の保存が、固定的なモノの保存ではなく、きわめて複雑かつ困難であり、長期にわたる取り組みが必要であることを暗示している。

多岐にわたる本事業の具体的な実施計画は、以下に示す4項目に要約できる。

- (1) デジタル映画の保存・活用に関する調査研究
- (2) フィルム映画のデジタル保存・活用に関する調査研究
- (3) 諸外国におけるデジタル映画の保存に関する技術や法制度等に関する調査研究
- (4) 映画のデジタル保存・活用を担う人材育成

ここでいうポストアナログ時代とは、当然、アナログフィルムが映像の原基としてフィルムアーカイブを中心に、大量かつ長期に維持されることを前提としているため、単に(1)に言うボーンデジタル映画の保存だけが研究の対象となるのではなく、それが(2)に言うフィルム映画のデジタル化とともに双方向的なアプローチを構成することが肝要であり、そのためにも(3)に言う映像音響アーカイブ先進国の取り組みに関する動向の把握は必須となる。また、(3)が広く最新技術から法制度の調査までを対象とし、さらにはその頻度の高い更新を求められるものである以上、(4)に言うデジタル保存と活用に関する教育的なアウトリーチ活動が欠かせないことも当然であろう。

調査研究にあたるチームには、デジタル技術、フィルム技術、アーカイブ研究、データベース研究等の広範な分野に対応し、また、十分な情報収集の能力がある人材を集めている²⁾。3年を一つの目途として行われる本事業は、草創から15年程を経た新たなデジタル映画時代の、さらには、それをハイエンドの一つとして内包しながら、いささかも進化の歩みを緩める気配のない巨大な“^{セカンドマシン}第二の機械の時代”の、さまざまな長所と問題とジレンマを分析し、大量の映像音響資料とそのデジタルデータを、アクセス可能な文化資産として、少なくとも百年以上にわたって保持・継承できるための国家的なグランド・デザイン作りの手助けとなっていくはずである。

コンテンツは大切だが、それだけが問題なのではない。むしろ問題は増殖しているようにさえ見える。例えば、今、一部で囁かれるようになった“メディアの残骸”(media carcasses)や“電子機器廃棄物”(e-waste)といった言葉が語る現実もある。BDCプロジェクトのような調査研究は、必要に応じて、世界中で発展的に継続され比較されなければならないだろう。

註

- 1 二つの事業「大規模災害に対応した文化財等の防災・救出に係る全国的な体制整備等」、「映画におけるデジタル保存・活用に関する調査研究」が公募され、前者については独立行政法人国立文化財機構が応募し、「文化財防災ネットワーク推進事業」が採択された。
- 2 ユニトリリーダーは、映画用カラーフィルムからデジタル化された映像データを3色に分解して保存する白黒レコーディング・フィルム(富士フィルムのETERNA-RDS)の開発で、2011年度の米アカデミー科学技術賞を受賞した工学博士・大岡勝久。



▲フィルムセンターに保管されている各種デジタル記憶媒体。HDCAM-SR(左下)、Digital BETACAM(左中、以上2種はビデオテープ)、DTF2(左上)、LTO 5(右中)、LTO 6(右下、以上3種はデータテープ)、HDD(右上、ハードディスク)